安田女子大学紀要　41，273–281　2013.

作品制作の過程における学生の実態と指導に関わる課題
――漢字制作（行書・草書）を中心に――

谷　口　邦　彦

Problems Associated with Coaching in the Process of Creating a Work of Calligraphy

Kunihiko TANIGUCHI

は　じ　め　に

本実態調査は，安田女子大学書道学科学生の漢字制作，特に漢字作品の中でも一般的に割合として多い，行書および草書に基づく作品制作における課題を把握しようとするものである。これまでにも本学学生は，卒業制作展や大学祭において漢字作品を発表してきているが，臨書作品が中心で，漢字によるいわゆる創作作品は少ないのが現状である。それは，優れた筆跡の図版さえ手元にあれば，書き写す感覚で書ける臨書作品との違いがあるからかもしれない。

漢字制作には厄介な手順が加わる。つまり，字典にあたるなどの準備が必要で，また，その制作過程においては思考力，判断力，遂行力その他の能力が要求される，と考えられる。したがって，学生の持つ技能がそのまま作品に表現できるとは限らない。本学学生にもし足りない力があるとしたらどんな力か，それを明らかにできれば今後指導する上で有益となろう。

現状として，その足りない力を我々教師の援助に求めているのではないか。もちろん教師の援助は有益であるが，安易な援助が逆に学生の主体性を奪い，その後の漢字制作へと生かされていかない実態があるのではないかと予想する。教師による加朱添削という援助が中心に展開される「書道特殊実習」（集中授業）における実態調査からそれらの課題を明らかにしたいのが本稿の目的である。

1．方　　法

(1)　対象と授業概要

対　　象：安田女子大学文学部書道学科２年生「書道特殊実習Ⅲ」履修者 33 名

授業概要：漢字及び仮名を中心とする技能の向上を目的とする。今年度の課題は①漢字臨書②漢字創作③仮名臨書④写経⑤実用書（賞状）⑥硬筆（縦書き・横書き）。授業は，通常授業期間中に実施する隔週授業と夏季休業中の合宿（集中授業）により構成する。運営は「書道特殊実習Ⅰ」と合同し，１年から３年までの３学年によるグループ活動を基本に展開する。本調査に関わる②漢字創作は七言二句（14 字）を半切二行に収める課題で，集中授業の際に初見で制作する。制作に必要な字典や各自で用意した資料類は使って良いこととしている。

(2)　調査時期　2012年9月

(3)　調査内容

集中授業終了時に，以下の項目について質問した。

①書き始める前（課題プリントをもらい，1枚目を書く前まで）

ア．字典以外に何か参考にしたか。イ．参考にした人は何を参考にしたか。

ウ．自分の頭の中に作品のイメージがあったか。どんなイメージか。

②試し書きの過程

ア．草稿をもとに書いてみて，何が問題（課題）か把握できたか。

③練習の過程

ア．試書過程の問題（課題）は解決できたか。どのような方法で解決したか。

④仕上げの過程

ア．試書の過程と，主にどの点が変わったか。イ．その結果はよくなったか。

ウ．どこが良くなったか把握できたか。良くなった点を具体的にあげよ。

エ．自分の作品に満足か。理由をあげよ。

⑤次回へ向けて

ア．次に創作の機会があったら，主にどんなところを頑張りたいか。

イ．次回への自分の課題を把握できているか。

ウ．把握できている人は，解決するためにどのような方法をとるか。

⑥作品制作を通して（その他）

ア．難しかったことは何か。

イ．日頃，掛け軸などを意識して見るようにしているか。

ウ．日頃，展覧会や書道雑誌などで書作品を見ているか。

2．結果と考察

(1)　書き始める前（課題プリントをもらい，1枚目を書く前まで）

試し書きの前に草稿を作る。草稿作りについては7月の事前授業で手順を確認している。字典を各自用意し，字典から文字を拾って草稿を作る。

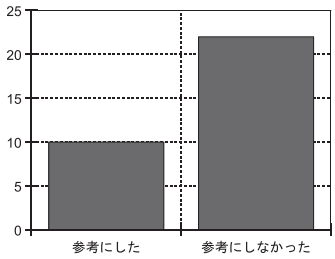

図1　字典以外に参考にしたものはありますか

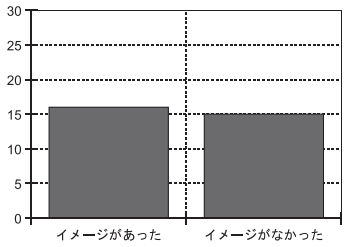

図2　作品のイメージがありましたか

図1のとおり，好きな作品の図版や，作品集の類を用意した学生は10名ほど。自分の書きたい抽象的なものも含めると半数になるが，具体的なイメージを持っていない学生が多いことがわ

かる。日頃，書作品を見ていないことが想像される。

表１　学生があげた作品のイメージ

全体の印象	躍動感ある作品。 勢いのある作品。 力強く。 ぽってりとした草書。
線質，用具・用材	墨の潤滑を生かした，太めで存在感のある作品。 連綿線をつける。 墨量や線質の変化に気をつけ，大胆に書いたイメージ。
全体構成	明るさ空間を広くとる。のびのびと自由に，軽く。
全体構成 特に「流れ」	連綿をつけ，流れるように。 連綿線があって流れるようなイメージ。 流れを作ってひとつのまとまった句になるような感じ。 軽い，流れのある感じ。 太い部分が二つくらいあり，全体手に流れのある作品。 流れるような中にも強さのある，というようなイメージ。

(2)　試し書きの過程

草稿をもとに試し書きをする。草稿通り書けないのは仕方ないが，ほとんどの学生は自分の試作に課題があることを把握している（図3)。具体的な課題は表２の通り。この過程では，全体構成，特にいわゆる「流れ」に関する課題を多くあげている。

一方，用筆・運筆や用具・用材に関する記述がないのは，上記の裏返しと見るべきか。学生が自身の作品を見る際の視点は，全体→部分へと向っていくようである。もっとも，用具・用材についてはその後の記述でもほとんど触れられることがないのは課題の一つかもしれない。

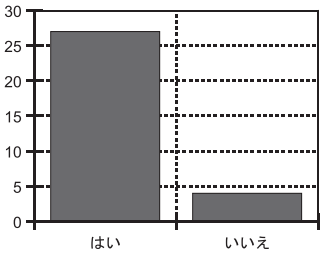

図３　何が課題か把握できたか

表２　　試し書き過程に把握できた課題

全体の印象	草稿とでは，できた時のイメージがまったく違う。 変化が少なくインパクトに欠ける。
線質，字形	文字が大きすぎた。 線の太細，同じ形にならないこと。 文字の大小，文字の中の線の変化，潤渇の変化。 字が淡々としていておもしろみがなかった。 字形の正確さ。

用筆・運筆	
用具・用材	
全体構成	文字の大きさと全体のバランス。 余白のとり方。 見せ場（字の）。 字間，文字の大きさ，全体のバランス。 字の大きさに違いをだそうと思った。 一行の文字数。 余白のとり方，作品としての見せ方。 字形がおもしろくない，文字の大きさが同じ。 密の部分と白が目立つ部分のバランスが悪い。 自分が一番見せたい字をどこにもっていくか。 文字の大小，字体の組み合わせ方。(2)
全体構成 特に「流れ」	連綿線と全体の流れ。 中心線が傾いている，流れが途切れる， 全体の流れ。 なめらかに書きたい。 連綿をどこにいれるか。(2) 自分が選んだ文字の字形では流れがうまくできなかった。 大きさが全部同じ，単調，流れがない。 流れがない。

(3)　練習の過程

図４のとおり，全員が何らかの変容を示したことが窺える。しかもそれは試書過程からの課題が解決できたというものである。その解決の方法を２つまで答えているが，「先生のアドバイス（加朱添削）」が断然多く，ほぼ全員があげている。

加朱添削は，教師による朱筆を使っての具体的なアドバイスであり，一般的な添削方法である。当該授業においては活動に組み込まれており，全学生は努めて添削を受けるよう奨励されている。そのことを反映したこの数字は当然と言えるが，他の方法をあげている学生は割合として少ない。図書館等へ移動し図版を調べる等ができないという今回の集中授業の性格上，仕方ないことかもしれない。授業形態自体に課題があるとすれば改善していくべきだろう。

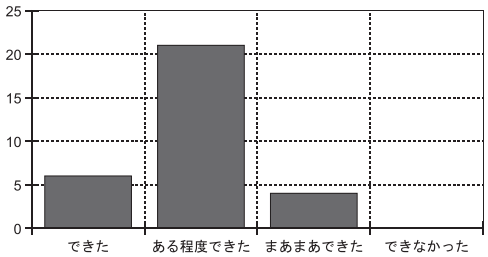

図４　試書過程の課題は解決できたか

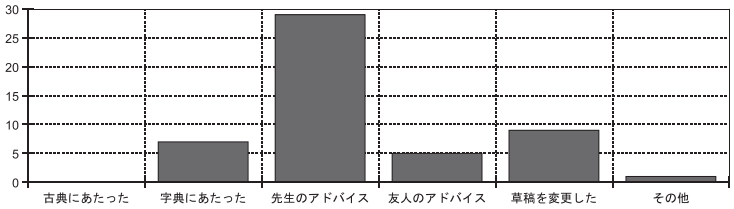

図５　解決できたのはどの方法か

(4)　仕上げの過程

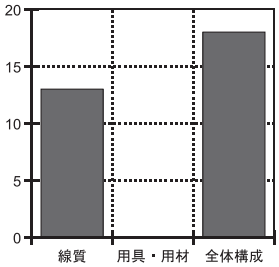

図６　試作とどこが変わったか

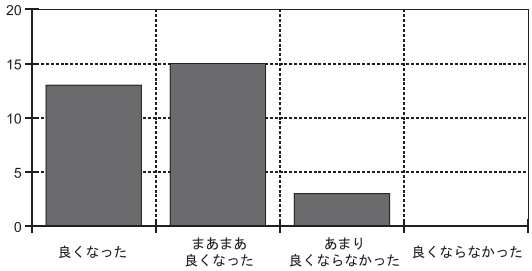

図７　その結果は良くなったか

仕上げの過程での学生の自己評価は，図６，７のとおり，「線質」「全体構成」が「良くなった」と答えている。改善された箇所について認識できており，受動的に捉えているわけではない。ここでも，用筆・運筆，用具・用材についての記述がない。図６で「線質」をあげているにもかかわらず，自由記述で触れられていないということは，もしかすると，「線質」に関わる用筆・運筆の基本的な事柄が理解できていないためかもしれない。そうであるならば，早急に補完していかなくてはならないだろう。

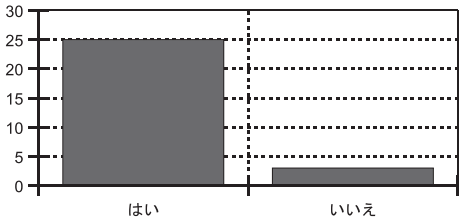

図８　良くなったところを把握できたか

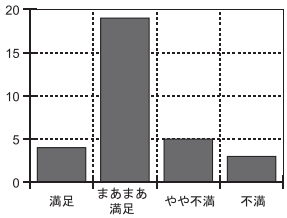

図９　自分の作品に満足か

表３　改善された箇所

全体の印象	
線質，字形	一文字の中に太細をつくったことですっきりとした。 具体的な字形(2) 字形に変化がだせた。(2) 線質がのびのびとなった，友人の作品と比べて，刺激を受けた。

	試し書きの時の問題点（字の大きさ，形）が良くなった 線質の変化がつけられるようになった（縦の線を強く書くというような）。 字形を変えて，字の大小に変化をつけた 文字の大小をつけられたこと。
用筆・運筆	
用具・用材	
全体構成	全体的な構成(6) 行間　が空いて，文字の大きさが小さくなった。 草稿よりも変化に富んだ作品に近づいた。 余白の使いかた 余白を生かしながら，墨だまりなどをつくることができた。
全体「流れ」	流れがでた。(2) 草書を行書に変えたことで，流れすぎたところをキビしく書けた。
認知・理解	全体のバランスから見て，書体を変えた方が良い文字が分かったこと 全体的に流れしかイメージしていなかったので全体に考えた。 字典の字を自分の表現に変える点

評価したいのは表３の最下段に，「全体のバランスを見て，書体を変えた方が良い文字がわかった」「字典の字を自分の表現に変える」といった記述が見られることである。内的な動機によって作品制作に向かう可能性を感じさせる記述である。

学生は自分の作品にほぼ満足している。「やや不満」「不満」の理由を見ても，その記述からは次の制作へと繋がる可能性を秘めており，「時間が欲しかった」以外は，各自の課題を把握できた良い結果と捉えることもできよう。また，「不満」の学生に，用筆・運筆，用具・用材に関する記述が見られることは，分析力の高い学生だからかもしれない。「満足」には，教師のアドバイスを丁寧に受けたことによる部分が大きいことも想像される。

表４　満足，まあまあ満足の理由

全体の印象	かっこよくかけた
線質，字形	文字の大小と線の太細を自分の納得いくよう創作作品を作ることができた。 「明」「月」を違うようにできた。 納得のいく渇筆が出た。 墨量の変化がつけられたし，筆が開けた。 草稿の時より，線質の変化をつけれるようになった。また文字の大きさも大胆に変えられるようになった（潤渇がマイナス点ではあるが）。 「中」という字が一番，私が思う作品のポイントです。 「葉」という文字がまあまあよく書けたと思う。
用具・用材	
全体構成	どの文字も雰囲気が合っていて，全体的にまとまった。 全体の構成がよくなった 。(2) 全体のまとまり具合，縦の流れが練習の時よりも良くなったから。 余白が活かせている。事前の練習より成長できたと思います。 先生のアドバイスで，だいたいの全体の構成がわかったから。

全体「流れ」	力強い，流れが出ている， 「落葉中」がきれいにつなげられた。
認知・理解	自分の頭の中のイメージを表現することができた。 今までと違った作風が築けたから。 途中で草稿と作品をすべて作り直した結果，良くなった。
その他	前回の創作の反省を生かせた。

表５　やや不満，不満の理由

全体の印象	一字一字を慎重に書きすぎてあまりよくなかったです。 もう少しおもしろい変化をつければよかったと思うから。
用筆・運筆	自分が思ったよりも多少はレベルの高い作品が書けたと思うけど，まだまだ筆の使い方がなっていなかった。
線質，字形	文字の大小をつけることができなかった。 もっと潤渇の変化をだす，筆の開閉をはっきり。 線（とくに横画）に変化が見られないし，同じ大きさの字が多い。
用具・用材	墨量の変化をもっとつけたかった。
全体構成	半切の上が空いてしまったから。
全体構成 特に「流れ」	特徴がなく，流れがよくなかった。 もう少し流暢に書きたかった（書けると思った）。
認知・理解	創作をしたことがなかったので，どこまで書いていいのかわからなかった。 自分の中でどうしていいか分からなくなってしまった。 自分の中に迷いがあってよくわからないまま創作を進めたから。
その他	時間がもっと欲しかった（仕上がりきれていない）(2)

(5)　次回へ向けての課題

図 11 の通り，学生は次へ課題を把握できている。図 10 の通り，線質や全体構成に関わる課題が大半を占めているようだ。今後の授業ではこの項目を重点的に扱っていくこととしたい。この課題解決のための方策としては，「作品を見る」が最も多く，教師のアドバイスを上回ったのは意外だった。

学生自身，今回の作品制作を通して鑑賞能力の欠如からくる自己学習力の不足に気づいたものと思われる。改めて，古今の優れた作品を提示する，相互に見せ合うなどの活動を指導へと積極的に取り入れていく必要を感じる。

同時に，学生は臨書の必要性を実感している。今回の作品制作を通して，これまでは，ややもすると「臨書のための臨書」に終わっていたものが，字形が整わない，字形に変化を出したいのに出せない，といった場面において，過去の優れた筆跡が最も参考になることを知った。

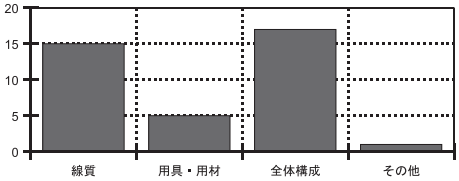

図 10　次はどこを頑張りたいか

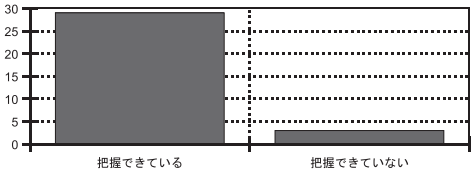

図 11　次の課題が把握できているか

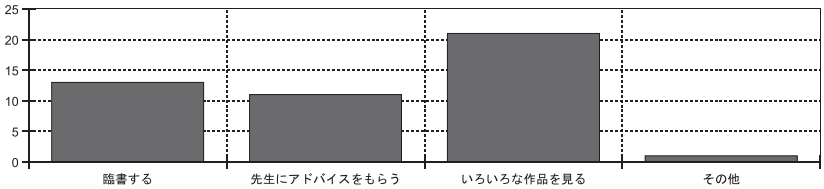

図 12　課題解決のためにどの方策をとるか

(6)　7 月からの作品制作を通して

7 月の事前授業から草稿作りを演習し，作品化への手順を確認する活動を行ってきた。いわゆる創作は初めて，という学生が大半という状況から 2 ヶ月余り。全員が作品を完成させることができたことは著しい成長と言ってよい。作品化の過程を振り返ると，図 13 の通り，全体的に難しさを感じているようである。

教師のアドバイスに頼らず，自ら作品制作へ取り組むためには，書くことの技能だけでは解決できないことがわかる。制作途上でつまずいた時の対処法を知らないことが浮き彫りになった。図 14，15 でわかるように，日頃あまり書作品を見ていない。

作品制作の原動力となるのは教師のアドバイスの他に，内的な動機，具体的には「あんな作品を書きたい」といった内発的な思いを持つことが不可欠であると考えられる。こうした学生の意識の変革をもたらすような授業展開を考案していく必要があろう。

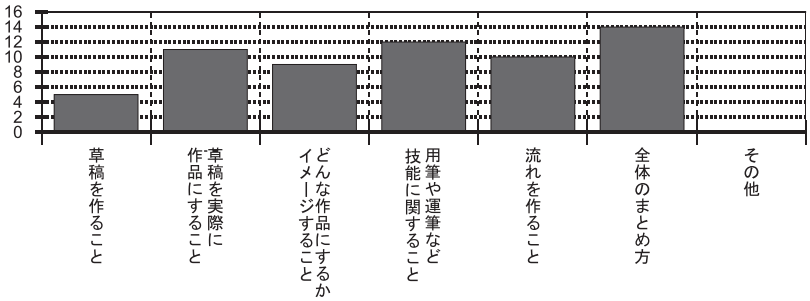

図 13　漢字制作で難しいところはどこか

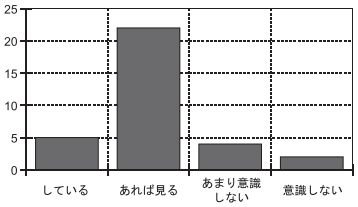

図 14　日頃掛け軸を意識して見るか

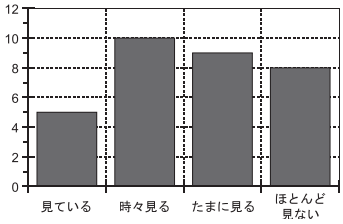

図 15　日頃展覧会などで書作品を見ているか

お　わ　り　に

以上のように学生の作品制作過程を辿っていくと，いくつかの指導上の課題が見えてくる。まとめると次のようになろう。

①自分が書きたい作品のイメージをあまり持っていない。

②「用筆・運筆」「用具・用材」に対する工夫を考えることが少ない。

③制作過程でつまずいた時は，教師のアドバイスによって解決しようとする傾向がある。

④日頃，書作品を観ることに関心が薄い。

「書道特殊実習Ⅲ」で制作した作品は，当該授業の到達目標を十分クリアできる優れたものが多く見られた。学生の自己評価（図 9）を見ても満足度が高く，学生自身も驚くほどの作品となり，7 月の草稿作りと比較して著しい成長を見せたと思う。だが，これは図 5 のとおり，教師による加朱添削の賜物であって，学生自らの工夫によって到達したものとは言えない。

一方，図 11 の通り，ほとんどの学生は次への課題を把握できており，図 12 の通り，作品に目を向けることの必要性を実感できている。教師からのアドバイスを上回っていることに安堵を覚える。学生のこうした自主性の芽を大事に育てるようにしたい。

上記①～④をまとめると，次のア～ウがあげられる。

ア，用筆・運筆，用具・用材といった基本的な知識技能を補完する。

イ，展覧会等を鑑賞する機会を増やすなどし，更なる鑑賞力を磨く。

ウ，参考作品の図版や資料等を自ら収集整理できるよう情報検索・処理能力を身につける。

このことを踏まえ，今後の授業実践を展開していかなければならないと考える。

［2012. 9. 27　受理］